

## 母国とは日本語である

——「拓殖文化」の発刊に寄せて

学長 渡 辺 利 夫

ある一文をここに紹介したくて我が家の書齋を探しているのだが、どういうわけか出てこない。山本夏彦の『完本・文語文』である。かすかな記憶によれば、「母国とは日本語である」といったような表現でこの本は書き出されていたように思う。

私どもはまぎれもなく古来連綿とつづく日本の文化的伝統の中で生を紡いでおり、過去と断絶することなどありえない。日本語の中には、最近のようにこれがいかに乱れてしまってもなお、日本人の思考様式、感情体系、さらにいえば審美観や死生観までもが豊かに潜んでいる。日本人が何を美と感じ、何を善とみなし、何を徳としてきたのか、何をもって死に臨もうとしてきたのか、すべてが日本語の表現様式の中に、見据えればありありと浮かんでくるのである。はるかに遠い過去から現在にいたるまで日本の無数の民草が営んできた「生」の現在における集約が、今私ども毎日使っている日本語なのである。

保守といい革新という。これは所詮は政治用語でしかない。言葉によってコミュニケーションを図り、言葉によって思考する人間は、そのすべてが本質において「保守」なのである。そう考えれば、今生きている人間だけで将来の日本を決するような行動を軽々にやってはならない、ということにもなる。しかし何事かを決定しなければ世の中と人生は前には進めない。この矛盾を解くには、日本の文化的伝統に深く思いをいたし、死せる過去の人々の声を耳をそばだてて聞き取りながら、日々の決定をなしていくことであろう。そう考えれば真の改革者とは純正な保守主義者でなければならぬ。

「拓殖文化」は、日本の文化的伝統を広く深く探求し、その上に立って日本を真に変革する、そういう精神

をもった教員、学生、職員の集合意思であってほしい。

創刊されて間もない拓殖大学麗澤会文化局連合会のジャーナルであるが、これが高い志をもって後輩に受け継がれ、拓大家族の精神的バックボーンとなっていくことを私は心から願っている。